

男ざかりの 美学

桐島洋子



文藝春秋

男ざかりの
美学

桐島洋子

著者略歴

1937（昭和12）年東京生まれ。56年都立駒場高校卒業。56～64年文藝春秋に勤務。64年よりフリーのルポライターとして海外各地で取材活動続け、72年にアメリカ在住の体験を綴った「淋しいアメリカ人」で第三回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に「淋しいアメリカ人」「マザー・グースと三匹の子豚たち」「貴方にもこの潮風を樹の匂いを」（文藝春秋）「風の置手紙―渚と霧と舵へ」（R出版、角川文庫）「女ざかりの美学」（じゃこめてい出版）「聡明な女は料理がうまい」（主婦と生活社）「女ざかりからの出発」（文化出版局）等多数ある。

男ざかりの美学

定価 1000円

1981年3月30日第1刷

著 者 桐島洋子

発 行 者 半藤一利

発 行 所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 03-265-1211（代）

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 大口製本株式会社

© YōKo Kirishima 1981 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

男ざかりの美学／目次

I

男ざかりの美学	11	海部さんガンバレ	46
右半球のオトコ	16	男女の争い	51
秘密のアジト	21	海外逃亡	56
ソドムの市	26	住民エゴ	62
“分相応”の世界	31	歩け歩け	67
議論のない国	36	旅行アニマル	72
筆まめのすすめ	41	料理は愉し	77
		スコットランド	82
		犬派と猫派	87
		学童疎開	92

オトコの哀れ	97	愛国と売国	147
ああ国際人	102	タカリズム	152
旅に病んで	107	井戸端会議	157
翔べない女	112	ジシンの研究	162
地方は今……	117	カセット人間	168
サボテン便り	122	食貧しき者よ	173
ハロー宇宙人	127	人質作法	178
スキヤンダル	132	ローン漬け	183
成人の夜	137	感傷旅行	188
不快の表明	142	熱烈歓迎	193

世代交代 198

Do it yourself 203

アナタの方舟 208

葬送行進曲 213

さらば夏休み 218

明日は我が身 223

“交際”の求め方 228

父よ母よ！ 233

名声の責任 238

どっちもどっち 243

こちらヒューストン 248

しみじみ日本 253

往生ぎわに 258

II

宴の始まり 265

ノラの帰宅 269

積極的日本人 273

表現力再開発 277

母母子家庭	281	女子大生輸出	315
評論家	285	嫌子権	317
現代の方舟	289	一億総給食	319
秋のコンミュン	293	あとがき	321
エリーテスト	297		
最後の贈物	302		
言葉の不自由	306		
日本の差別	308		
悲愴と甘え	310		
ブロック	312		

装幀
写真

平野甲賀
松山猛

男ざかりの美学

I

男ざかりの美学

文藝春秋の雑誌にモノを書くということは、私が今までどうしても平気になれない仕事のひとつだった。なぜかについて、しばらくウジウジと私事私情の陳述をお許し頂きたい。かつて私は文藝春秋の女の子だった。婦人記者なんてカッコいいものじゃない。原稿など書くのは男の仕事と決っていて、女の子の方はお茶を淹れ、灰皿を洗い、屑籠を空け、お使いに走り、新聞雑誌を綴じ、おやつのアミダでも作り、それから封筒の宛名に健筆を揮^{ふる}ったりするうちには日が昏れる気楽な稼業だったのだ。その女の子感覚が文春の名をきくと、俄然メラメラと甦^{よみがえ}る。高校までしか行かなかった私には、大学生が自分より年下だということもいまだに信じられないのだが、そういう感覚の冷凍保存が人生の随所で行われて、しばしばこんなタイム・トリップをひき起すのだ。そこで「お茶」と命じて下さるのなら「ハイッ」とさわやかに応じて水屋に走りもしようが、「原稿を」ではギョッとすくみ上る。同じ原稿でも文春でさえなければ、大アサヒだろうと大コーダンシャだろうとはじめから恐れも知らずシャラシャラと書けた。それが古巣の雑誌となるとどうもいけない。男が時たま理不尽に不能になるのも、あるいはこん

なことなのだろうか。

もっとも私の不能とはコチコチの硬直状態だ。緊張し過ぎて面白い原稿が書けるためにはないが、ともかく編集長の前では直立不動の女の子に戻ってしまうのである。

ところが今度、週刊文春の新しい編集長から電話がかかって来て驚いた。彼と私は同期の桜。昭和三十一年に入社した大学卒男子四名の一人が彼で、高校卒女子三名の一人が私である。彼は一万五千元、私は九千円の初任給だった。

ああ、なんとということか、オドオドと身を寄せ合って入社式に臨んだあの紅顔の青年が編集長！ そうだ、ダテに月日が過ぎたわけじゃない。彼だってたしかに今や押しも押されぬ中年のオジサンなのだ！ 十二時の時報を耳許に乱打されたシンデレラのように、私は飛び上り、タイム・マシンから転落して、遂に青春の呪縛を解かれたのである。

そして私もはじめて押しも押されぬ中年のオバサンとして、編集長の前に寛ぐことができたのはいいけれど、その弾みでついこんな連載まで引き受けてしまったのは軽率だった。

美学だなんてさてもおこがましいことではないか。そもそも男ざかりとは何なのか。その辺りの認識さえまださだかならぬ心細い書き出しなのだ。

たまたま来合せた若い編集者に「男ざかりについてどう思うか」と訊ねたら、「ヤッバ、大学の頃が一番激しかったですねえ、噴火山みたいなもので抑えようがないんだから」なんて言う。パーカ、さかりがついたのと男ざかりとを一緒にするなんて、男ざかりには程遠い男だな。やっぱり人間、若いのは詰らない——と、いささか中年の意気上ったところで、四十代のボー

イ・フレンドに電話する。

「あなたはいま、男ざかりよね。女としてはそう評価するけど、自覚的にはどう？」

「ぼくは四十二歳の厄年ってやつを深い実感をもって通過したものだ。厄年をもってひとまず下げどまるんだ」

「下げどまるって？」

「体力とか記憶力とか、それから俗にハメマラとか言うだろう、その辺が二十代のピークからはずっと下降線をたどるだけだったのが厄年から水平になり高原状態に入る。勿論下げどまらない奴もいるよ。連中はツケを払ってるんだ。暴飲暴食暴淫のたぐいのツケが確実にくる」

「その下がりどまった高原状態が男ざかりってわけ？」

「そう思って悠然と高原を愉しめばいいんだが、下がったものがとまると上ったような気がしたりするもので、もっと上るのではあるまいかとさもしい期待にとられる。焦るんだなあ。ちょうどその年頃にふと同僚を見まわしたら、みんなあのプロプロの紅茶キノコを机に抱え込んでせっせとすすってるんだ。日本の知性と謳われるような連中がだよ。なんたる光景であるかと慄然としたね。今はあれほどまがましいものではないけど、ランニングとかぶら下りとか、世にも単純なおまじないがまたうける」

「なんだか男ざかりの男達ぐらい素直なカモはいないみたいねえ」

「落日を少しでも遅くと焦る男には、女の一顰一笑なんてものがひどくこたえたりするものだ。亭主の努力をあなたなにを今更と冷笑するカミさんが多いんだ。だからといって一緒に音

無く老い朽ちていきましようというわけでもないんだな。なにやらそれぞれ思惑があって、美容院なんかでシコシコやってるんだろ。おぞましい風景だねえ」

いや、しかし、シコシコやるのはいいことだ。やはり男も頑張って下さいな。男ざかりの美学を書くことに、ようやく使命感が湧いて来た。

ただし私の美学はどうも内面に偏り勝ちである。最近、戸川昌子さん、俵萌子さんなど大貫祿の姐御達の男談義を拝聴する機会を得たが、「男は姿よ」という声が圧倒的で、私がオズオズと「姿もさることながらやはり中身こそ！」と口をはさんだら、「あなたは若いネ」と一笑された。若いというよりは古いのかもしれない。男が美女を愛するように、男についてもなによりも美しきをもつてよしとする女が確実に増えているのだ。

となると中年男は旗色が悪く、中年趣味の私は、しばしば女仲間の侮蔑に耐えなければならぬ。

「なによ、あのモッテリボッテリのイモ男。冴えないわねえ。近頃の若い子はいいわよオ。脚がサーッと長くてお尻がコリコリで」

「そうかなア、脚長男なんてアメリカではジャブジャブつきあったけど、別にどうってことなかったわ」

といくら言っても、やはり脚とお尻にこだわる女は多いのである。

しかし私は日本の風土が育んだ日本の男の現実を凝視め、イモを掘るようにその魅力を探り